

鹿島茂

下
論語篇

一栄沢渋

文春文庫

渋沢栄一
下
論語篇

鹿島茂

か
15
9

文春文庫



910
+ 税



9784167590086



1920195009109

ISBN978-4-16-759008-6

C0195 ¥910E

定価（本体910円＋税）

「どうしたら、永く儲けられるのか？」欲望を肯定しつつ、一定の歯止めをかける。――出した答えは、「論語と算盤」だった。大蔵省を退官し、五百を数える事業に関わり、近代日本経済の礎をつくった渋沢。事業から引退した後半生では、格差社会、福祉問題、諸外国との軋轢など、現代にも通じる社会問題に真っ向から立ち向かう。

か 15 9



文春文庫

第七十二回 豪商の娘、奇人の姪

豪商の娘兼子と再婚

明治十五（一八八二）年七月に妻千代をコレラで失った渋沢は、それからしばらくして、幕末維新の豪商と謳われた伊藤八兵衛の娘兼子と再婚する。

この結婚からは、次男武之助、三男正雄、三女愛子、四男秀雄、五男忠雄（早逝）が生まれ、明治二十四年に渋沢自らが定めた「家法」の規定によっていずれも「渋沢家同族」と認定されることになる。

つまり、伊藤兼子との結婚はあくまで正式な結婚であり、子供たちは紛れもない嫡子なのだが、にもかかわらず、この再婚には一つの大きな謎がついてまわる。結婚が行われたかはっきりしないのだ。冒頭で「それからしばらくして」とわざと曖昧な表現をしたのは、再婚の時期がいま一つ定かではないためである。

まず、渋沢秀雄の手になる伝記『父 渋沢栄一』を見ると、父の再婚について次のように書かれている。

「明治十六年に栄一は再婚した。後妻兼子の父伊藤八兵衛は一時豪商と謳われたほどの人だったが、商売の手違いで没落したまま世を去った」

この記述は渋沢秀雄がその後何度か出した焼き直しの渋沢栄一伝でも変わらない。つまり、秀雄は父や母から、再婚は明治十六年と聞かされていたのである。

ところが、いろいろと資料に当たってみると、これとは異なる説を唱えるものが存在する。本稿でも何度か引用している『穂積歌子日記』がそれである。編者の穂積重行は明治二十四年一月三日の日記に出てくる「母上」という言葉に注をつけ、こう語っている。

『母上』は歌子の義母『かね子』。栄一は十五年に妻千代を失い、十八年末頃かね子と再婚した。歌子は千代を敬慕することが深く、この再婚にあきたらぬ思いがあったらしいと推察され（23・6・2参照）、最初はうちとけなかったようであるが、この時期ともなればそうした様子は特にうかがえない」

また、別の箇所（妻妾同居の妾だった大内くにを巡る〔補遺9〕）には、こうある。

「本文で述べた通り、栄一は十五年七月に千代を失い、十八年の秋から暮までの間に伊藤かね子と再婚するが、この時かね子はすでに妊娠していた（武之助、十九年二月生）」（同書）

穂積重行は穂積陳重・歌子夫妻の孫（ということは渋沢のひ孫）であり、渋沢家の内実にも詳しく、その考証も歴史学者らしく厳密を極めているので、渋沢の再婚が明治十八年の秋から末にかけてであったとする以上、確たる証拠があるに違いない。穂積重行は兼子が武之助を身ごもっていたことが、渋沢がその時期に再婚に踏み切った主たる動

機と見なしているようだ。いいかえれば、渋沢の再婚は「正式には」明治十八年末頃だったものと考えて差し支えないのだ。

ただ、穂積重行も、他のところ（明治二十三年六月二日の日記の注）で、渋沢の再婚話がすでに明治十六年に動き始めていた事実は認めている。すなわち、渋沢の長男篤二の放蕩に関する穂積歌子の反応を補足した箇所、次のように述べているのである。

「要するに篤二は金持ちの『おぼっちゃん』である。父はあらゆる意味ですでに堂々たる名士である。母は多感な少年時代に没し、父は間もなく再婚した。このことは歌子にとっても、もちろん大きなショックであったに違いない。『まえがき』で触れたように、十六年の日記の後半がまったく白紙のままになっていることは、この時期に再婚の動きが始まっていることと思ひ合わせると、歌子の心境を憶測させるもののものである」（同書）

以上の穂積重行の記述を総合すると、伊藤兼子との再婚話は明治十六年に持ち上がり、十八年の末に正式に決まったということになる。これは、『渋沢栄一全集』の第五巻に収録された「青淵渋沢栄一子爵年譜」の明治十八年に関する記述の最後に掲げられた次のような微妙な文章と照らしてみても、ほぼ確実と見てよいようだ。

「尚ほ、当時先生は伊藤八兵衛の女兼子を迎へられてゐた、即ち今の子爵夫人がそれである」（傍点鹿島）

ところである。これで再婚時期についての謎は解決と思いきや、念のために白石喜太郎『渋沢栄一翁』（刀江書院）という伝記をひもといたところ、次のような仰天すべ

き記述に出くわしたのである。

「外部の活動に忙しい子爵は少しも家庭に安居する日がない。自然幼かりし琴子氏篤二氏等に淋しさを感じしめざるを得ざりしは堪へ難いことであつた。そこで新たに夫人を迎へることになつた。斯くして明治十六年一月迎へたのが、兼子夫人である。（中略）新たに夫人を迎へてからの子爵の家庭は再び春を迎へ、和やかな空気が溢れた。かくて明治十七年十一月二男敬三郎を挙げた。不幸翌十八年春夭折したが、明治十九年臘尾、三男武之助氏が生れ、悲の涙を払ふに余りがあつた」

伊藤兼子との再婚が明治十六年一月であつたというのはまだしも、明治十七年十一月に二男敬三郎が生まれ、翌十八年春に夭折したというのは初耳である。「敬三郎」という名前は、後に長男篤二に長男が生まれたときに「敬三」と命名されたことから考えても、いかにもそれらしい名前であるが、他の公式伝記にはその存在は一切触れられていない。

となると、この『渋沢栄一翁』という本がどこまで信憑性のある伝記かということが問題となる。第一、白石喜太郎とはだれなのか？

『渋沢栄一翁』に添えられた著者自身の「序に代へて」によると、白石喜太郎は東京高等商業から第一銀行に入り、大正三（一九一四）年からは、日本橋兜町の渋沢事務所で渋沢の秘書として十八年の間つかえた人物である。

『渋沢栄一翁』の元になった原稿は、昭和五年から後藤登喜男主宰の経済雑誌『経済知識』に「人間渋沢栄一」と題して連載されたものだが、連載時には「和泉清」のペン・

ネームで発表されていた。渋沢は、毎号『経済知識』を読んでいたもので、その微に入り細を穿った内容に興味を示し、娘婿の明石照男に命じて、著者「和泉清」の正体を突き止めさせた。

「明石氏の報告によつて一層興味を催した子爵は、更に初めより読み返され、辞句の習熟せざる点、接続の不十分なる点等に一々筆を加へられ、觀察の正鵠を得ざる点、記述の不備なる点を懇切に示教せられました。而して後になつては雑誌の発行を待ち遠しとして、書くに随つて原稿のまゝを徴して眼を通され、更に進んで頻りに続稿を急がれる様になりましたので、その熱心に動かされ、朝夙く、又夜おそく、出来るだけ稿を急ぎ、いつしか進んで『雨夜譚』の範囲を越しました」

『「雨夜譚」の範囲』を越えたというのだから、白石喜太郎は、明治六年の大蔵省退官後の実業家時代の記述までは、渋沢のチェックを受けながら原稿を書き進めたことになる。ところが、昭和六年の夏に至つて渋沢が病の床に伏し、十一月にはついに大往生を遂げたため、白石喜太郎は続編を書く氣力を失い、筆を断つてしまふ。

しかし、昭和七年一月に、おりから大学病院に入院中の渋沢の孫の敬三を訪ねたところ、敬三から続編の執筆を強く慫慂され、またその場に居合わせた渋沢秀雄からも同様に勧められたので、「遂に思ひ返し、故子爵追福の一端にもとの意を以て稿を続けるの決意をなし」、「稿を起して以来五年にして、茲に漸く完成することを得ました」という。

白石喜太郎の言葉に偽りはないようで、『渋沢栄一翁』に寄せた「序」の中で渋沢敬三は「祖父の伝記としては、叙述に最も困難と目される中年と晩年とを、斯くの如くま

とめられた白石君の力には、全く敬服の外ないのであります」と持ち上げている。

では、こうした白石と渋沢敬三の証言は何を意味すると考えればいいのか？

それは、第一に『渋沢栄一翁』が渋沢及び渋沢家のチェックを経た「認定済みの伝記」であるということ、第二に、そうである以上、渋沢の再婚に関する記述は、渋沢及び渋沢家の「公式見解」だということである。渋沢本人のチェックがどこまで及んだかは明らかではないにしても、渋沢同族の三代目である敬三の目は通っているはずだから、渋沢の再婚が「明治十六年一月」であることは、「公式」に認められたことになる。

とすると、先の穂積重行の「再婚明治十八年説」は誤りなのか？

ややこしいことだが、どうもそうでもないようなのである。

つまり、渋沢家の公式見解では、渋沢の再婚は明治十六年（一月）だが、実際に再婚が行われたのは明治十八年の末だということである。

この時間的な「ずれ」、じつは、伊藤兼子が再婚候補として浮上したその経緯と密接に結びついているのである。

兼子はどのようにして妻となったのか

穂積重行は先に引用した明治二十四年一月三日の日記の注の続きの部分で、兼子とその父の伊藤八兵衛についてこう述べている。

「かね子の父伊藤八兵衛は幕末から明治初期にかけて豪商として鳴らしたが、十年代半ばにはすでに振るわなくなっていたらしい。かね子も料理屋の座敷女をしているうち

に栄一に知られたというような伝承があるが、その辺のことはよく分らない。十八年三十三歳である」

この「伝承」は本当なのか？ 渋沢関係のあらゆる資料を「渋沢青淵記念財団竜門社」の研究員の手を借りて渉獵したはずの穂積重行が「その辺のことはよく分らない」と言っているのだから、やはり確かめようはないものなのか？

じつは、私も半ばあきらめかけていたのである。

ところが、資料というのは「求めよ、さらば与えられん」の理どおり、探していると向こうから現れるものらしい。なんのことはない、手元にあった岩波文庫の中に、渋沢の再婚にまつわる話を書き留められていたのである。

明治大正期に活躍した女流作家長谷川時雨の『新編 近代美人伝』（杉本苑子編）で、その劈頭を飾る「明治美人伝」の一節に兼子のことが出てくる。

それによると、兼子の父伊藤八兵衛（長谷川は「伊東」と誤記）は油堀で伊勢八という店を営む豪商で、水戸藩の金子御用達であった。米相場や洋銀相場に手を出し、始めは、伝説の相場師「天下の糸平」こと田中平八とやり合うほどだったが、やがて没落したため、十二人兄弟姉妹の一人であった兼子も路頭に迷うことになる。すなわち、十八歳のときに江州から婿を迎え、何不自由なく暮らしていたが、伊勢八の屋台骨が傾くと同時に、婿は近江に帰り、兼子は働きに出ることになる。

ここまでは、渋沢秀雄や穂積重行の記述と変わらない。問題はこの続きだ。長谷川時雨はこう書いている。

「彼女は逢う人ごとに芸妓になりたいと頼んだのであった。『大好きな芸妓になりたい』そういう言葉の裏には、どれほどの涙が秘められていたであろう。すこしでも家のものに余裕を与えたいと思うところと、身をくだすせつなさをかくして、きかぬ気から、『好きだからなりたいたい』といって、きく人の心をいためない用心をしてまで身を金にかえようとしていた。両国のすしやという口入れ宿は、そうした事の世話をするからと頼んでくれたものがあつた。すると口入宿では妾の口ではどうだといって来た。

妾というのならばどうしても嫌だと、口入れを散々手古摺らした。零落（れちふろ）れても氣位をおとさなかった彼女は、渋沢家では夫人がコレラでなくなつて困っているからというので、後の事を引受けることになつて連れてゆかれた。その家が以前の我家——倒産した油堀の伊勢八のあとであろうとは——彼女は目くらめく心地で台所の敷居を踏んだ。

彼女はいま財界になくはならぬ大名士の、時めく男爵夫人である。飛鳥山の別荘に起臥（おきふし）されているが、深川の本宅は、思出の多い、彼女の一生の振出しの家である——書き方が多少ぼかしてあるので、わかりにくいだが、長谷川が書いていることを敷衍（ふたふ）するとういうことになるのではないか。

家が没落して働きに出るほかなくなつた兼子は「好きだから芸妓になるのだ」と周囲の人の心を痛めないように気を配って、「身を金にかえよう」としていたが、いざ口入れ屋を紹介されると、芸妓ではなく妾の口ならあると言われたため、妾ではいやだと駄々をこねた。どうも、この妾の依頼先は渋沢家だったらしい。千代がコレラで死んで、渋沢が性欲の処理に「困つて」いるのを見かねた家の者が口入れ屋に妾の紹介を頼んだ

ものと思われる。そのあたりの事情を聞かされた兼子は、境遇に同情し、渋沢家に住み着くことに同意したのだらう。すると、なんとしたことか、渋沢が住んでいる邸宅というのは、以前、兼子が住んでいた油堀の屋敷だったのである。

少し出来過ぎの感のあるエピソードだが、しかし、明治十六年一月と明治十八年末との間の「ずれ」の理由を見るには、格好の資料である。

おそらく、没落した富豪の娘である兼子が渋沢家に「入った」のは、白石喜太郎が再婚の時期としている明治十六年一月頃なのだらう。渋沢は、先妻の百カ日を過ぎた明治十五年十一月頃から、残された幼い子供のためであって、後妻のことを真剣に考え始めにちがいない。

ただ、渋沢本人の考えと周囲の思惑がかならずしも一致するとは限らない。周囲は、いづれ適当な配偶者が見つかるまで、とりあえず妾で処理するという急場しのぎの方策に出たのではないか。兼子が口入れ屋から「妾」として紹介されたのはそのためである。ところが、妾として斡旋されてきた兼子を渋沢は意外にも気に入ってしまった。豪商の家で箱入り娘として育てられたにもかかわらず、兼子には控え目ながら芯の強い一面があり、それが渋沢の琴線に触れたものと思われる。

そこで、兼子との再婚話が持ち上がったのだが、これには、千代を敬慕する歌子などの強い反対があったらしい。歌子が反対する理由として、渋沢が以前から「妻妾同居」させていた大内くんの存在があったものと思われる。

穂積重行は先に引用した『補遺9』『おくにさん』のことで、娘時代の歌子にとつ

て大内くんには「子供の時から家にいる人」であり、むしろ、親しみの持てる存在だったとして、これが渋沢の再婚に際してのネックになったのではと指摘している。

「なお、千代の没後栄一の周囲では『くにが後添になるもの』と考える人が多かった」という伝承にも自然な面がある。そしてそれには『栄一がかね子を選んだことについて歌子がくにに同情して、後々まで世話をやいた』というオマケまでついている。たしかに歌子は当初かね子に対して打ちとけぬ感情を抱いていたようであるが、そのために妾の『くに』に同情したとすれば、右に述べたようないくつかの状況を考え合わせなければ無理がありそうである」

十分に考えられることである。おまけに、明治十五年には共同運輸会社が設立され、三菱汽船会社との激烈な戦いが展開されていたから、渋沢があえてこの時期に正式な再婚を言い出すひまはなかった。伊藤兼子は、明治十六年一月から「事実上の妻」でありながら、正式には妾の地位に止まっていたものと思われる。

ところが、明治十七年になると、状況が変わる。兼子が妊娠したのである。このとき、渋沢は内縁関係を正式なものにしようと考えたのではないか。とりわけ、十一月に二男敬三郎が誕生したときにはその可能性は高かった。しかし、なぜか、このときにも渋沢は決断を先延ばしにする。その理由はわからない。だが、敬三郎が十八年の春に早逝して、夏にまた兼子が身ごもると、さすがの渋沢も決断を下さざるをえなくなる。兼子は晴れて正式な妻となったのである。

しかし、そうすると今度は、正式な妻となった兼子が、再婚前に渋沢との間に一児を

もうけていたという事実が邪魔になる。この矛盾を解決するには、方法は一つしかない。兼子との結婚を、兼子が渋沢家に入った時点でまで戻し、「明治十六年再婚」とすることである。こうすれば、最初妾として家に入った兼子が正式な妻に「なおった」という事実をカムフラージュすることができるばかりか、夭折した息子も二男敬三郎として弔うことができるのである。

明治のシンデレラストーリー

さて、以上が、渋沢の再婚時期の「ずれ」を巡る考察だが、当時の資料をあらためてひもといてみると、没落した大富豪伊藤八兵衛の娘兼子が渋沢の後妻となったという事実は一種のシンデレラ物語として相当人口に膾炙していたらしく、今日でも入手可能な文献にも言及があるのに気づく。

その一つが篠田鋳造の『幕末明治 女百話』（岩波文庫）。第一話「油堀伊藤家の八人娘」がそれである。この回想によると、伊藤八兵衛は江戸末期、京橋南伝馬町の太刀伊勢屋伊藤八兵衛という貸金御用達の店に、姉娘の婿養子となって入った。先代は人が良すぎて、諸藩に貸し付けた金が回収できずいたため、店は左前になっていたが、婿養子として入った伊藤八兵衛は持ち前の辣腕を発揮し、債権をどしどし回収していったので、伊勢屋はたちまち隆盛を迎えたという。とりわけ、水戸藩の金銀貸付所の支配人格の地位にありついたことが大きかった。

やがて、伊藤八兵衛は自らの「貸付所」を設け、金融業を本格的に営むことになる。

その繁盛ぶりに目をつけたのが尊王攘夷派の水戸藩士たちである。中でも武田耕雲斎の孫金次郎は天狗党の挙兵のため、八兵衛を絞り上げることを思いつき、一万両を出せ、出さなければ命を貰うぞとすごんだ。すると、八兵衛は「どうぞ御存分に」と拒絶したので、牢にぶち込まれてしまった。これを心配した家族が一万両を積んで身受けすると、八兵衛は「この首が尊くなった、価一万両か」と大笑いしたそうである。なかなかの豪傑だったのである。明治になると、八兵衛は水戸藩の別邸だった佐賀町油堀の大邸宅を買い取り、ここに妻妾同居のかたちで家族を住まわせた。兼子は八人いた嫡子の娘の五女である。篠田鋳造は、いかにこの屋敷が広大だったかを言葉を尽くして描写している。

「佐賀町油堀の御邸内は、旧水戸の御用邸で、邸内西側に倉庫があつて、そこに『水戸様御用』という杭が樹たてっていました。（中略）諸大名の御使者を迎える御座敷で、とても贅沢な、御立派なものでした。御三家の内でも、『御屋形』と唱えた水戸様ですからね。この御座敷の床の裏手に、八畳二間と十畳一間があります。これがまた御娘方の御控室で、渋沢子爵未亡人は、ここで御育ちになつたんです。乳母日傘で、風にも当らない御育柄なんです。（中略）長廊下を北に外れると橋懸となつていて、橋を渡つた御座敷が、十八畳二間、これには場所柄潮入りの大きな泉水を前に遙かに築山を眺め、名は変ですけれど、『手長の松』を始め、『月見の燈籠』『亀の子石』から青赤白の三枚橋が、御座敷から見透しなんですが（後略）」

しかし、栄華を極めた伊藤八兵衛も、時代が進み、投機の形態が変わると、大きな損を抱えるようになる。三井物産のお雇い外人だったアルピンというアメリカ人と組んで

起こした貿易会社が十万円の赤字を出したのが蹟き石となり、あつというまに破産の憂き目を見たのである。

「これほどの御家でも、亡びる時は、秋の陽が暮れるより早いものでした。御家屋も御地所も投出してアツサリしたものです。また来る春を待ったんですが、御一代二度と花は咲きませんでした」

渋沢たちのような近代的な実業家と入れ替わるようにして消えていった幕末維新の投機的な豪商、それが兼子の父伊藤八兵衛だったのである。兼子は、一生の間に、「前近代」と「近代」の商業の富の有り様を経験したことになる。

では、その富の有り場所、つまり伊藤八兵衛の深川の邸宅と渋沢のそれは、長谷川時雨の言うように「同じ屋敷」だったのだろうか？

どうもそうではないようである。というのも、明治九年の秋に海運橋近くの家から引越した深川福住町の屋敷について、穂積歌子はこう描写しているからである。

「ここは元、近喜という大きな商家の住居であつて、建物も大きく地所も広い。川に面した門から玄関までの間に貸倉が並んでいて、米穀その外のもが出し納れされた。これが渋沢倉庫の元祖ともいふべきものであらう。庭には大きな汐入りの池があり、放った緋鯉が連なって泳ぎ廻っていた様子が、まだ目に残っている。それから庭には非常な大木の桜が二本あり、一もとは染井吉野、一本は普賢で、春ごとに美しい花盛りを見せた」(『ははその落葉』)

たしかに、佐賀町油堀と深川福住町は現在の住所表示では、江東区福住二丁目付近に

当たるし、倉庫、潮入りの池などは同じだが、庭の大木は松と桜というように違う。それに、歌子は「近喜という大きな商家の住居であつて」と述べているので、屋敷自体は別のものであったのではないだろうか。近くには似たような豪商の大邸宅が立ち並んでいた、長谷川時雨が混同した可能性は十分にある。

それよりも、われわれ、多少とも明治の文学史をかじった人間にとつて驚きなのは、兼子の父伊藤八兵衛が、明治一の変わり者の画人淡島椿岳の実兄であるという事実の方だろう。内田魯庵『新編 思い出す人々』(岩波文庫)の「淡島椿岳」の項目には、こう書かれている。

「爰に川越在の小ヶ谷村に内田という豪農があつた。(今でもその家は歴とした豪農である。その分家のやはり内田という農家に三人の男の子が生まれた。総領は児供の時から胆略があつて、草深い田舎で田の草を取って老朽ちる器でなかつたから、これも早くから一癖あつた季の弟の米三郎と二人して江戸へ乗出し、小石川は伝通院前の伊勢長といえはその頃の山の手切つての名代の質商伊勢屋長兵衛方へ奉公した。この兄が後に伊藤八兵衛となり、弟が椿岳となつたので、川越の実家は二番目の子が相続して今でもなお連綿としておるそうだ」

つまり、川越在の内田三兄弟の長兄が伊藤家に養子に入つて伊藤八兵衛となり、三男が淡島家の養子に入つて淡島椿岳となつたということだ。兼子は明治一の奇人画家淡島椿岳の姪であり、椿岳の息子淡島寒月の従姉に当たるといふわけである。

もっとも、魯庵は、「実業界に徳望高い某子爵は素と八兵衛の使用人であつて、先年

物故した夫人はタシカ八兵衛の遺子であつた」などと注をつけているから、兼子が渋沢の後妻であることは知っていたものの、渋沢本人の経歴に関しては、誤解していたようである。渋沢喜作が米相場やドル相場を手掛けていたとき、八兵衛と関係があつたので、そのあたりの記憶が混じりこんだのかも知れない。なお、内田魯庵は、別のところで、長兄が伊藤家の養子となつたのは、最初の奉公先の伊勢屋長兵衛が主家で、その肝煎りで分家の伊勢八に養子に入つたのではないかと推測している。ありそうな仮説である。魯庵はまた、伊藤八兵衛は幕末には、江戸一の大富豪として第一に指折られた人物であると語っている。水戸の天狗党に献金を無理強いされたという話は本場で、額も一万両ではなく三万両であつたようだ。また御一新の御東幸の時に、三井が三万両を用意したのに、伊藤は五万両を出したという。魯庵はこうしたエピソードを挙げたあと、伊藤八兵衛に関して、こう結論している。

「八兵衛の富力はこういう事実から推しても大抵想像される。その割合には名前が余り知られていないが、一生の事業と活動とは維新の商業史の重要な頁を作つておる。今では堀田伯の住邸となつておる本所の故宅の庭園は伊藤の全盛時代に椿岳が設計して金に飽かして作つたもので、一木一石が八兵衛兄弟の豪奢と才氣の名残を留めておる」

こうした事実は渋沢も把握していたにちがいない。とするならば、渋沢は、妾として口入れ屋から回された兼子の容姿性格が気に入つたばかりでなく、伊藤八兵衛の娘であるという出自にもおおいに興味をそそられたのではないか？ つまり、兼子が一代の快男児の娘であり、才人画家の姪ならば、自分との間にできる子供にも、優秀な血が流れ

ると踏んだのではなからうか。渋沢は婿選びのさいに典型的にあらわれたように、金（財産）よりも、血（遺伝的優秀さ）を重視したからである。